

農産FAX情報 第2号

令和8年6月1日

ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

1 秋まき小麦

(1) 赤さび病の防除

- ・本病は5～6月の高温小雨により多発しやすくなります。
- ・止葉が出る頃から穂ばらみ期の薬剤散布により予防できます。

表1 赤さび病の防除例

対象病害	系統名	薬剤名	希釈倍率	使用回数
赤さび病 (うどんこ病)	SDHI	ミリオネアフロアブル	4,000～ 8,000倍	2回

(2) 植物成長調整剤

- ・茎数が多い場合は、登熟期の風雨で倒伏するおそれがあるため植物成長調整剤の散布を検討してください。

表3 植物成長調整剤の使用例

商品名	使用時期	使用方法	注意事項
エスレル10	止葉期～ 出穂始期	200～333ml /10a	・使用濃度は300倍～500倍。 ・30%以上の出穂をみてからでは倒伏軽減効果が劣る場合があるため適期に処理する。

(3) 赤かび病の防除 (開花始から1週間間隔で3回)

- 止葉期は平年(5/25)よりも4日進んでいます。
出穂がほぼ揃った頃～開花前を確認したら1回目の防除を行きましょう。
- 赤かび病は開花時期が最も感染しやすいため、第1回目の防除は「開花始」に実施します(図1参照)。

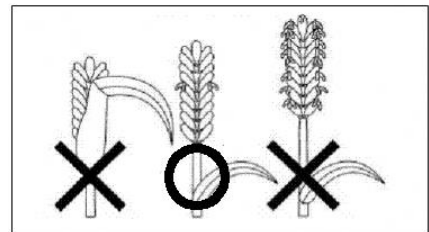


図1 開花始の目安

表2 赤かび病防除を中心とした防除体系例

防除時期	薬剤名	分類系統	使用濃度(倍)	使用回数	使用時期
1回目防除 (開花始期)	プロラインフロアブル	DMI	2,000	2回以内	7日前
2回目防除 (7日後)	ミラビスフロアブル	SDHI	1,500	2回以内	7日前
3回目防除 (7日後)	プライア水和剤	N-フェニルカーバメイト MBC	1,000～ 1,500	2回以内	21日前

注①：耐性菌の出現を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、系統が異なる薬剤を組み合わせましょう。

注②：プライア水和剤の収穫前日数を、厳守していただきますようお願いいたします。

3 アブラムシの防除

○出穂以降は、アブラムシ類の防除時期となります。出穂 10 日後頃に 1 穂当たり 7～11 頭寄生する（寄生穂率が 45%を超える）場合は減収になるので防除しましょう。（表 4）

4 てんさい

(1) 中耕

○除草や地温上昇効果が期待できます。時期が遅れると根葉を傷めるため注意が必要です。

(2) テンサイモグリハナバエ

○被害が散見されるようになったら防除を開始しましょう（表 4）。

5 ばれいしょ

(1) ナストビハムシの防除

○成虫は、萌芽期頃に成長点付近を食害し生育を妨げるため、成虫・食害痕を発見次第、薬剤散布を 7～10 日間隔で 2 回実施しましょう（表 4）。

○6 月上旬ごろから産卵が始まり、ふ化した幼虫は地中に入りストロンや根、塊茎を食害し甚大な被害となります。

表 4 殺虫剤使用例

適用害虫〔作物〕	薬剤名	処理濃度(倍)	使用回数
アブラムシ〔秋まき小麦〕	スミチオン乳剤	1,000	1回
	ウララDF	4,000	2回
テンサイモグリハナバエ〔てんさい〕	カスケード乳剤	4,000	4回
ナストビハムシ〔ばれいしょ〕	アクタラ顆粒水溶剤	2,000	3回
	モスピランSL液剤	4,000	3回

6 豆類

○除草剤について、パワーガイザー液剤を使用する際は、有機リン系殺虫剤・イネ科除草剤を使用する場合、薬害の恐れがあるので 10 日以上あけて散布するよう注意が必要です(表 5)。

表 5 除草剤使用例

薬剤名	使用方法および使用時期、10aあたり使用量	大豆		
		大豆	小豆	菜豆
パワーガイザー液剤	雑草茎葉散布又は全面土壌散布	出芽直前～出芽揃 200～300ml		出芽直前～出芽期 200～300ml
		初生葉展開期～1葉期 200～300ml		

農業機械の操作はあせらず、安全確認を！